

「男女共同参画の視点に立った防災」啓発の意義

私たちはなぜ「男女共同参画の視点に立った防災」を伝えるのか？

災害時に命と心身の健康を守り、生活の安全を図る ためには

被災という緊急時にあっても、誰もが等しく尊重される ことが大事



さまざまな立場の人たちが共に責任を担いながら支え合う 体制が必要



平時(日常)にできていないことは緊急時にはできない



平時からの男女共同参画社会実現に向けての活動推進 が重要

男女共同参画の視点に立った防災 は、その中に含まれるコンテンツであり、

誰にもその重要性が理解しやすい テーマである

熊本地震を経験した
私たちが提案する



熊本地震を経験した私たちが提案する 男女共同参画の視点に立った防災ポイントBOOK

目次

- はじめに 1
- 「男女共同参画の視点に立った防災ポイントBOOK」を制作するに当たって 2
- 第1章:被災経験が教えてくれたこと
 - (1)女性に何が起きたのか? 3
 - (2)男性に何が起きたのか?10
 - (3)若者(青少年)に何が起きたのか?12
 - (4)高齢者や障がい者、外国人、性的少数者に何が起きたのか?14
 - (5)支援者に何が起きたのか? 19
- 第2章:日常的に災害に備える～男女共同参画の視点に立って～ 22
- 資料①:熊本市男女共同参画センターはあもにいの熊本地震時の取り組み 26
- 資料②:熊本地震の概要 29



はじめに

過去の大きな災害は、男女共同参画と防災が非常に重要な関係にあることを教えてくれました。

2016(平成28)年4月に起きた熊本地震において私たちは、男性と女性のニーズの違いをはじめ、乳幼児、妊産婦、若者、高齢者、障がい者、病人、外国人、性的少数者…など、それぞれに必要な支援を考えた行動が大事であることを学びました。さまざまな立場の人たちが共に責任を担いながら支え合う「男女共同参画の視点に立った防災」が非常時に力を発揮し、その後の心身の回復に影響することを知ったのです。

この冊子は、災害時に必要な「男女共同参画の視点に立った防災」について伝えるため、熊本地震時に私たちが経験したこと、調べたこと、考えたことをもとに作成いたしました。特に、震災の翌年に当センターが行ったアンケート調査をまとめた冊子「熊本地震を経験した『育児中の女性』へのアンケート報告書」に掲載した市民の声を生かすことを心掛けました。

私たちは防災の専門家ではありません。技術的なことをお伝えすることはできませんが、被災経験から感じ、考えたことを皆さまと共有し、皆さまの思いや知恵を加えて発展させていければ幸いです。

大規模地震の被災地として得た教訓を「一過性に終わらせない」、また「一地域だけにとどまらせない」ための活動を、今後も継続していきたいと考えています。

2019(平成31)年3月

熊本市男女共同参画センターはあもにい
館長 坂本ミオ

第1章

被災経験が教えてくれたこと

(1) 女性に何が起きたのか？

固定的性別役割分担意識による弊害など
避難所生活から見た課題と解決策を考える

「男女共同参画の視点に立った防災ポイント BOOK」 を制作するに当たって

私たちは本誌を制作するに当たって、当センターが熊本地震後にアンケート調査を行って制作した報告書、熊本市の男女共同参画啓発情報紙、熊本市市民局市民生活部男女共同参画課が編集・発行(公式HP上に掲載)したハンドブックの情報を使用しました。

【熊本地震を経験した「育児中の女性」へのアンケート報告書】

2018(平成30)年3月当センター発行。A4判、72P建て。副題は「今だから言える『私は、こんな支援が欲しかった!』」。

16(同28)年4月の熊本地震の際、またその後の避難生活などにおいて、子育て世代の女性が抱えた不安感に焦点を当てたアンケート調査を行い、およそ1,200人の回答を得た。

調査項目は、避難中・避難後の生活について、震災後の困難、現在の困りごと、復興に向けての意見、震災を通して生きる姿勢や考え方の変化、防災における男女共同参画の視点を生かすために取り組むこと。

被災したから分かったこと、感じたこと、考えたことが、ありのままの言葉でつづられている。



【情報紙はあもにい】

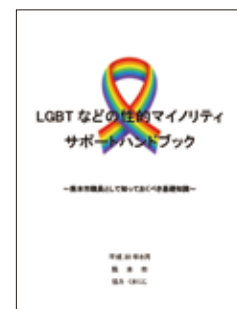


熊本市の男女共同参画啓発情報紙。A4判、12P建て。年2回発行。キャッチコピーは「私らしく あなたらしく 一人ひとりが輝く社会へ」。

毎号、4P程度の巻頭特集を組むが、熊本地震後の2016(平成28)年10月発行の81号では『被災者になったから見えた、考えた』熊本地震から歩み出す若者(わたしたち)の男女共同参画、17(同29)年2月発行の82号では「男女共同参画の視点から見た熊本地震」を特集した。

【LGBTなどの性的マイノリティ サポートハンドブック ～熊本市職員として知っておくべき基礎知識～】

2018(平成30)年8月熊本市市民局市民生活部男女共同参画課発行。A4判、14P。性の多様性の尊重や市民等への対応、職場における対応などが記載されている。その中の、災害時における対応(避難所等での困りごと)から、当事者の声を拾った。



※LGBT…レズビアン、ゲイ、バイセクシュアル、トランスジェンダーの頭文字をとったもので、性的マイノリティの総称として使われる



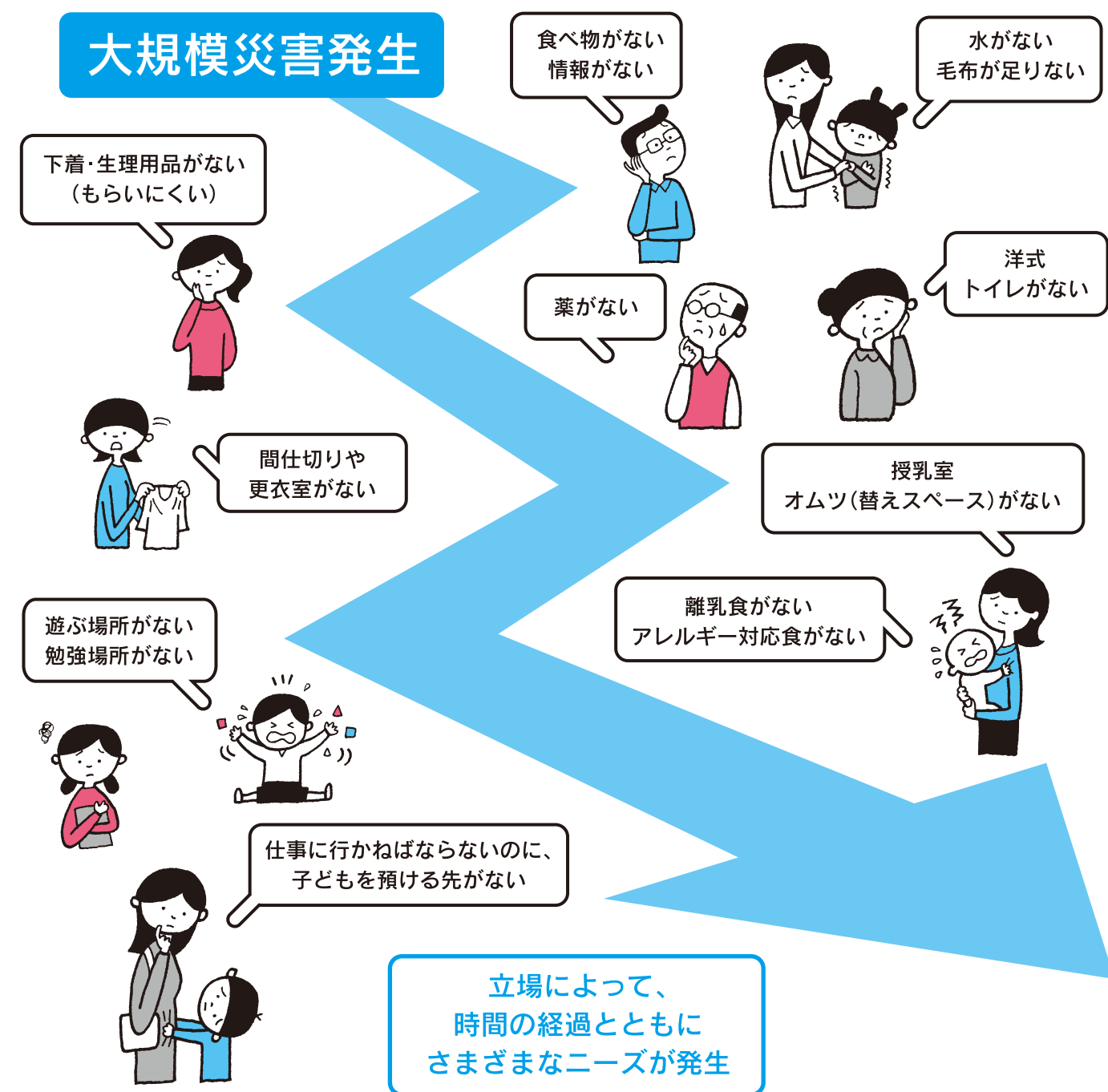
※固定的性別役割分担意識…個人の資質や能力等にかかわらず性別によって役割を固定する考え方のこと

避難所は、地域であり家庭。 暮らしを営むには「さまざまな視点」が不可欠

大規模災害が起きると、避難生活が始まります。避難所の運営責任者の多くは男性です。女性をはじめ多様な立場の人たちは、さまざまな作業を担ってはいても、意見を取りまとめたり決め事をしたりする場に参画していない状況が見られました。そのことによって、必要な支援が届かなかったり、

不快な思いをしたり、思わぬ被害に遭うことさえ起こります。

集団生活となる避難所は一つの地域であり、それぞれの家庭にもなります。さまざまな視点、立場を大切にすることが求められます。



◎避難所運営におけるリーダーが男性に偏ったことで…

オムツや生理用品などの〈物〉、更衣室や間仕切り、授乳室などの〈スペース〉のニーズがつかめない。渡し方などに配慮ができないといったことが起きた。

当センター発行「熊本地震を経験した『育児中の女性』へのアンケート報告書」から

● 分からない男性が悪いのではなく、分かる女性が運営に関われば解決できることが

● 女性自身も自ら要望を声にし、運営に積極的に関わろう

● 防災や避難所運営マニュアルを作成する段階から女性の参画が不可欠

あなたが考える解決策は…

● 大切なのは責任者やリーダーの性別ではなく、実行する内容ではないですか。女性を起用しないと改善できないのであれば起用を増やすべきでしょうが…。最適な人材であれば男女問わず責任者になっていただければいいと思っています。

● 女性は子育てしていくために細かいところに気がつく本能があると思うので、防災・災害時に多く必要だと思う。



● 復興には各所で女性のリーダーも置き、しっかり細かいサポートもいき渡るようにしていただきたい。あらゆる人に平等にサポートがあるべきだと思う。

● まだまだ育児は女性が中心なので、とにかくたくさんの分野に女性が入り込んでいけたらと思う。自分もそんなリーダーシップのある女性になりたい。

◎妊婦や子ども連れの家が感じたのは…

妊娠中の体の状態を理解、配慮してもらえない辛さ、子どもが騒ぐことへの周りへの遠慮、思いやりのない発言や配慮のなさへの失望感などの居心地の悪さ。

当センター発行「熊本地震を経験した『育児中の女性』へのアンケート報告書」から

- 子どもを抱えた女性は、災害弱者の一人だと思う。災害時に、育児中の女性に必要な情報(おむつや離乳食、ミルクやお湯の配布、子どもとお母さんの心理的サポートの相談など)をHPでまとめて表示できるようにして、そのアクセス先を平時から情報提供すること(例えば母子手帳への記載、子どもが利用する施設にパンフレットを置くなど)も工夫してほしい。非災害時(平時)からの支援が必要だと思う。

- 仕切り等がなかったため、「子どもがうるさい」と文句を言う人がいた。こういうときこそお互いさまなのにと失望した。子どもがいる家庭を別スペースにする等の配慮があればと思います。



- 被災時は「お互いさま」という気持ちを持つことが大事。そういう気持ちを持てる関係性を、普段から地域の付き合いの中でつくっておくことも

- 避難所には子どもが遊ぶスペースや道具が必要

- 平時から災害時の親子向け情報を確認

- 妊娠中であるかどうかの確認と配慮を

あなたが考える解決策は…



- 児童館など、子どもが遊べる環境のある所が避難所になれば良いと思う。



- 地震の後、妊娠している人のケアをもっとしてほしかった。妊婦なのに水をもらうのに3時間並ぶのはとてもきつかった。

◎固定的性別役割分担意識がもたらしたのは…

「避難所の運営責任者は男性、炊き出しは女性」といった役割分担は、責任ある仕事が男性に集中し心身を疲弊させ、一方では終わらぬ食事作りを女性が担い、休むことができず過労に陥るなど、男女相互に無理を強いる場面が見られた。

また、大規模災害時、幼稚園や保育園、学校がすべて休みになった際、保護者が全員働かなければならない場合、子どもをどうするのか。ほとんどの場合、母親が休まねばならないという問題が起きた(介護も同様)。

当センター発行「熊本地震を経験した『育児中の女性』へのアンケート報告書」から

- 両親とも仕事があるのに、「子どもの預け先がないと休むのは母親」という雰囲気があり、そこは夫婦間の理解も必要だが、男性にも子どもが小さい(介護が必要な親がいる)等で、休みを取ったらどうか、と言える職場にできればと思う。女性には女性の役割もあるが、仕事も含めて男女ともに分担していくべきだと思う。

- 男性は仕事に行き、女性は仕事をしつつ、育児もほぼ一人で負担するスタイルがこの地震で強くなったと思う。男性も女性も共に育児をしないと、女性は子どもに優しくできなくなってしまう。



- 性別にかかわらず、適性に合った仕事をする。それぞれが「自分は何がやれるのか、得意なのか」声を上げる雰囲気づくりが必要。そのために普段から地域での活動や交流を

- 職場の意識改革と災害時のルールづくり

- 大規模災害時の子育て家庭の勤務については、家庭や企業、地域を超えた社会の課題として捉え、取り組む必要がある

あなたが考える解決策は…



- 地震後、保育園が休みのため、仕事を休む行為が「地域社会へ貢献していない」ように上司に評価され、私も被災者なのにと、心底腹が立った。